

創立40周年記念公演 第2弾は…

運命とボレロ

第78回 定期演奏会
2017年 9月18日(祝・月) 14:00開演
厚木市文化会館 大ホール

どこから聞こえるのか、蝉たちの歌声に夏真っ盛りを感じます。

今年もこの季節がやってきました。熱く巨大なエネルギーの塊に人間の方は参ってしまいそうですが、周りの自然は、これを楽しんでいるかのようですね。

どうぞみなさまも、お健やかに日々をお過ごしください。

さて、創立40周年記念演奏会第2弾は、どなたにも楽しんでいただけるようクラシックの名曲のなかでもとりわけ有名なあの2曲を取り上げます。

「運命」と「ボレロ」! 普段クラシックを聴かない人でも、きっとこの題名とメロディーの断片はご存知ではないでしょうか。有名な曲を演奏できるのは楽しみでもありますが、どちらも決して易しい曲ではないのです。特に「ボレロ」は各管楽器の首席奏者が交代であるメロディーを歌い継いでゆくのですが、そこにはソリストならではの喜びや悩み、苦しみがあるかもしれません。

というわけで、今回は「ボレロ」のソロを担当する管楽器奏者たちの中から、ファゴットの今井幸太郎さんとトロンボーンの佐藤秀義さんにそのあたりのお話を伺ってみることにいたしました。

(※佐藤秀義さんには友の会通信の専属カメラマンとして、いつもお世話になっています。)

「ボレロ」ソロ担当のお二人にインタビュー!!!



ようこそ、友の会インタビュールームへ!!

まずお二人に、それぞれの楽器歴をお伺いしたいと思います。

今井さんはファゴットを、佐藤さんはトロンボーンを始められたのはいつからですか?

また、それはどのようなきっかけからだったのでしょうか?

今井: 始めたのは高校生のときです。たまたま吹奏楽部の顧問の先生が「一つ席が空いているから来てみなさい」と言われて吹いてみたのがきっかけでした。大学時代にいったんブランクがありましたが、社会人になってからやっぱりオーケストラの中で吹いてみたくなり再開、今に至ります。

佐藤: トロンボーンを始めたのは中学の吹奏楽部からです。小学校の器楽合奏団の先輩がトロンボーンをやらないかと誘ってくれました。

偶然にもお二人とも、ひとから勧められて今の楽器を始められたわけですね。

ほかに何か、別の楽器の経験はありますか?

今井: ピアノを続けていて、実はファゴット歴よりも長いです。一人で弾くのもいいですが、やはり室内楽とかも楽しいですね。

佐藤: 習っていたのはエレキギターとギターですね。小学校の器楽合奏団ではフルートを吹いていました。ギターは一年くらいで挫折しました。

今井さん、ピアノもお弾きになるのですね。ちょっと意外で素敵です。佐藤さんはずいぶんいろいろ経験されていますね。もしずっとフルートを続けていたとしたら、ここではフルートの席に座っていたのかもしれないけれど、その姿は今は、ちょっと想像できないですね(笑)。
ところで今井さんに伺いますが、ファゴットという楽器はいかがですか？音を出すのが大変難しいと聞いたことがあります。

今井：非常に奥が深い楽器だな、と思いますね。音域がとても広いものの、楽器の構造が原始的なところがあるためか、高い音になってくると指使いが不規則になり、音程もとりづらくなるのが難しいです。ただいろいろな音が出せる楽器なので、吹いていて楽しいですね。

原始的ですか…見た目にはずいぶんいろいろくっついていて複雑な構造に見えますけれどね。でも、リード系の木管楽器はみなさん、指使いは大変そうです。素人にはわからないご苦労があることと思います。
次に佐藤さん、トロンボーンについて教えてください。



佐藤：みた通りスライドで音程を変える楽器なんで良くも悪くも本人の音感次第なところが難しくもあり魅力でもありますね。トロンボーンが交響曲で使われたのは今回の演奏会で演奏されるベートーヴェンの交響曲第5番が初めてです。それまでは教会で演奏される神聖な楽器でしたので、トロンボーンがオーケストラで使われるときは何かしら神聖な意味合いが含まれていると言われていました。神聖な意味で使われるベートーヴェンと世俗的なジャズテイストのラベルのボレロ、それぞれのトロンボーンの使われ方に注目していただきたいですね。

なるほど、今回のプログラムをそういう風に捉えることもできるのですね。これは興味深いアドバイスをありがとうございました。確かに、トロンボーンによるコーラルは、とても厳かで温かい響きを感じられます。ブラームス1番の4楽章や、ドヴォルザーク9番(新世界より)の2楽章がパッと思い浮かびました。それからスライドで音程を変えるというのは、私達弦楽器も同じようなことをやっていますので(指で弦の長さを変える)なんだか親近感を覚えますね。確かに、良くも悪くも本人次第です(笑)。
ところで、ここでお二人のオーケストラの経験についてお尋ねします。厚響に入団されたのはいつからですか？それ以前にもアマオケの経験はお持ちですか？

今井：厚響にはたしか2014年です。もともと会社のアマチュアオーケストラ(ソニー・フィルハーモニック・オーケストラ)に所属しており、一緒に所属していたフルートの島さんから紹介され、厚響との縁がありました。



佐藤：厚木交響楽団には1999年の第41回定期演奏会から参加しています。エキストラでは1998年の厚木市文化会館20周年記念特別公演「くるみ割り人形」にも参加しました。オーケストラは大学オケが初めてですね。最初に演奏した曲はムソルグスキーの「禿山の一夜」でした。厚木交響楽団に入団前は横浜のアマオケにも参加していました。



さて、ではここからいよいよ「ボレロ」について伺います。今回、この曲のソロに決まったとき、どのように思われましたか？

今井：え、まさか自分がやることになるとは、とあまり実感がありませんでした。私の師匠から、「アマチュアオーケストラでボレロやるなんて珍しいね」と言われ、なかなか貴重な機会に恵まれたんだな、と思うようになりました。

佐藤：ボレロを提案したのは自分ですし、以前から50歳手前までにやりたかったので間に合って良かったです。以前、吹奏楽の編曲では吹いたことはあるのですが。

今井さんに伺いますが、先ほども指使いの話が出て来ましたが、特にこの曲は大変だという事を人から聞いています。他にも困難な点はありますか？

今井：ボレロのソロは、普段のオーケストラ曲で使わないような最高音近辺が出現し、私自身そもそもロングトーンで音を出すだけでも非常に苦労しました…。また、おっしゃるとおり、このソロは指使いも非常に複雑で(左手の親指1つで10個のキーを操作しないとイケない!)、吹いているうちに頭がこんがらがってしまうことがあります。

わあ、それは大変ですね。指1本で10個のキーなんて、聞いているだけでこちらの頭もこんがらがりそう!!
これから本番までの間のご健闘を祈ります。

これはお二人に伺いたいのですが、合奏に参加される前に個人練習をされますよね。それはどのような場所で、どのくらい練習されていますか？ご自宅では音を出すのもかなり大変なのではないかと思われませんか？ご近所への配慮の点から言うと、弦楽器は何とか自宅でも音を出すことは出来ますが、管楽器の場合はいかがでしょう。

今井：個人練習は、ちょっと言いにくいのですが、実はあまりできていないのが実際のところ。ただ、幸い自宅が楽器 OK（日中だけですが）で、ファゴットはほかの管楽器と比べても音が大きいほうではないので、音出しはほとんど自宅で行っています。

佐藤：金管楽器はプラクティスミュートという練習用のミュート（弱音器）がありますので、それで自宅でも練習可能ですが、自分は週一回練習場をとって練習しています。以前は安さからシロックスとかコーダジュールとかカラオケボックスを利用していましたが、割合隣室がうるさいので最近ではグリーンホール相模大野の練習室等を利用しています。ニールセンの時に参加していたチューバ氏はカラオケボックスでたまたま隣で練習していたのをスカウトしました。

プラクティスミュート装着！



なんと、そういう幸運な出会いもあるんですね。練習にカラオケボックス侮れません（笑）。しかし、金管楽器の上を行く隣室の歌声のボリュームとは、カラオケ恐るべしです。

さて、いろいろ伺いしてきましたが、最後に佐藤さん、今回聴きに来てくださる皆様にアピールしたいことなど、本番に向けての抱負をお聞かせください。

佐藤：ボレロはフルートに始まる 2 種類のメロディを様々な楽器のソロとアンサンブルの妙技で飽きずに聴かせる名曲ですが、トロンボーンのソロは最後のソロになります。リレーの様にみんなが繋いだタスキを最後に受け取るアンカーのつもりで全力で演奏したいと思います。

なるほど、「アンカー」ですか！フルートから始まって、次々とメロディを受け渡していく。「みんなが繋いだタスキ」という表現が秀逸ですね！そのほかにも、最初から最後まで機械のように同じリズムを刻み続けるスネアドラムや、黙々とピチカートを繰り返す低音弦楽器、そのほか今回ソロを取らない楽器も、最後はステージ上の全員が全力でエネルギーを集結させてピークに向かって行きます。聴きどころ満載の名曲「ボレロ」、どうぞご期待くださいませ！！

最後に、ご参考までに今の自分の楽器以外にオケでやってみたい楽器は何でしょうか？ひとつだけお答えください。

今井：同じダブルリード楽器であるオーボエですね。ただ、ソロも多いので、度胸が要求されそうですが…。

佐藤：ビオラ、ですかね～。

今井さん、佐藤さん、どうもありがとうございました！



2016 年度 会 計 報 告 (会計年度は 2016 年 4 月 1 日～ 2017 年 3 月 31 日)

【会員数】

種 類	年 会 費 (円)	人 数 (口数)	計 (円)
Solo	2,500	17 (18)	45,000
Duet	5,000	9	45,000
Concert	10,000	6	60,000
Symphony	30,000	1 (2)	60,000
計	—	33 人 (35 口)	210,000

【収入と支出】

収 入 (円)		支 出 (円)	
昨年度繰越金	43,378	郵送代	18,824
会費	210,000	事務用品	4,012
貯金利息	3	印刷費	18,410
		会員招待チケット代	105,000
		振込手数料	216
		交響楽団助成金	90,000
		慶弔費 (弔電)	0
		次年度繰越金	16,919
計	253,381	計	253,381

厚木交響楽団友の会 2016 年度会計は、6 月の定例役員会において、会計監査、承認されました。定期演奏会のチケット代金 57,500 円のほか、90,000 円を団への助成金として、楽器の運搬用トラックの維持費、ガソリン代等に充てさせていただきました。皆様の温かいご支援に感謝申し上げます。ありがとうございました。

神崎団長が語る

厚木交響楽団 40年の歩み

PartII：団創立20年から
30年までの歩み

厚木交響楽団は、当初39名であった団員数も創立20周年を迎えた1997年には101名の大所帯となりました。ちょうどその年の3月、座間市民混声合唱団第一回定期演奏会への出演を依頼されオペラアリアの伴奏、佐藤眞さんのカンタータ「土の歌」で合唱との共演という、他市の団体からの依頼公演を初めて経験しました。

創立20周年の記念演奏会は3回シリーズとし、シリーズIの第37回定期演奏会は、ベルリオーズ歌劇「ベンヴェヌート・チェリーニ」序曲とピアニストの花房晴美さんをお迎えてのドホナーニ「童謡「きらきら星の主題による変奏曲」、ベートーヴェン交響曲第5番八短調「運命」でしたが、厚木交響楽団始まって以来の客席がいっぱいになるほどの多くのお客様にご来場いただきました。

シリーズIIは12月7日の第38回定期演奏会で、ドビュッシー「海」、チャイコフスキー「弦楽セレナーデ 八長調」、ムソルグスキー組曲「展覧会の絵」を演奏しました。併せて節目の年として それまでの団の歩みを綴った「厚木交響楽団創立20周年記念誌」を発行し、翌年の1月に新年会を兼ねて厚木のロイヤルパークホテル(現レンブラントホテル)にて記念パーティを開催し、団員一同で創立20周年をお祝い致しました。シリーズIIIでは大曲マーラーの5番に挑戦しました。

1998年11月には厚木市文化会館20周年特別記念「厚木シティバレエ」公演で市内のバレエ教室に通う皆さんと共演、チャイコフスキーの「くるみ割り人形」全幕を演奏しました。文化会館のオーケストラピットでの初めての演奏、頭の上でトウシューズの音がコツコツ聞こえてきたことを思い出します。

同年8月には神奈川県アマチュアオーケストラ連盟に属するオーケストラが2団体ずつ順番に演奏会を受け持つ第6回アマチュアフェスティバルオーケストラ演奏会を、川崎市の麻生フィルハーモニーと共に担当し相模原のグリーンホールにて開催いたしました。

皆様のおかげでいつの間にか厚木交響楽団はとても忙しい演奏活動を送る日々となり行動範囲も広がって参りました。団員の志気も高まり、管楽器群の充実はそのチームワークの良さでもあり管楽器のメンバーによる独自の演奏会「厚木交響楽団ブラスアンサンブル演奏会」を海老名市文化会館で1999年10月と2001年9月に開催していました。第42回定期演奏会(1999年10月)でのレスピーギ「ローマの松」でも金管楽器は大活躍でした。2000年3月には厚木合唱連盟の20周年記念演奏会でヘンデルのオラトリオ「メサイア」を演奏、翌年9月にはあつぎ市民芸術文化祭「コーラスとアリアの夕べ」でオペラアリア、合唱との共演をしました。



「厚木シティバレエ」の
プログラム

こうして他団体との関わりが多くなってきたなかでも厚木交響楽団としての年2回の定期演奏会は着実に開催し、ティンパニーの菅原 淳さん、ヴァイオリンのマリア・アヤ・アシュリーさん、日下紗矢子さん、オーボエの青山聖樹さん、ピアノの花房晴美さん、白神典子さんと多くのソリストの方々との出会いから沢山のことを学ばせていただきました。

2002年12月8日の第48回定期演奏会終了後、それまで大変お世話になった常任指揮者の藤田由之先生が団を去られることになりました。藤田先生にはソリストのご紹介はもちろんのこと選曲についても沢山のアドバイス等をしていただきました。先生からいただいた恩恵の深さは計り知れないと痛感いたしております。私が団長になった1979年6月から23年間の長きに渡り、ほとんどお休みなく毎回のリハーサルに東京から厚木の練習会場までおいでになり、親身になってご指導くださいました。

先生は私の大学オーケストラの指揮者でもありました。先生との出会いは私の人生における大きな出会いであったと深く感謝いたしております。以後、厚木交響楽団は今日に至るまで常任指揮者を置かず、演奏会毎に客演指揮者の先生をお願いしています。

翌年2003年の第49回、第50回の定期演奏会は残念なことに厚木市文化会館の会場が確保出来ず座間のハーモニーホールにて開催いたしました。毎年こつこつと重ねてきました定期演奏会もいつの間にか50回になり「定期演奏会50回達成記念演奏会を横浜のみなとみらいホールでやろう!」という声が上がれば若い団員を中心に実行委員会が組織されました。みなとみらいホールでの初めての演奏会。横浜までの移動や楽器運搬はもちろんのこと、チケットの売り上げは?集客は?心配事はいろいろありましたが厚木合唱連盟のご協力ですべて「復活」合唱団が組織され、実行委員会の綿密な計画により2004年4月18日特別演奏会を行う事が出来ました。指揮は遠藤浩史氏 曲目はマーラーの交響曲2番「復活」でした。



藤田先生最後の指揮となった
第78回定期のプログラム



みなとみらいホールでの「復活」演奏会

その頃、指揮者の先生をどなたにお願いするかという事は特に重要な問題でした。ある日知人より指揮者の田久保裕一氏を紹介されました。その後2005年4月24日の第52回定期演奏会にご一緒して頂けることが決まりました。田久保先生は非常にエネルギッシュな指揮で熱くご指導くださいました。その反面、練習後にはとてもフレンドリーにお付き合い下さりゴルフや飲み会などご一緒させて頂きすぐに打ち解ける事が出来ました。田久保先生との出会いはとても嬉しく幸せなことでした。その時のスメタナの交響詩「我が祖国」より「高い城」と「モルダウ」、そしてカリンニコフの交響曲第1番はとても印象に残っています。

2005年9月の厚木市制50周年記念「あつぎ市民芸術文化祭」では、遠藤浩史氏の指揮によりパッサの管弦楽組曲とベートーヴェンの第九を演奏しました。

2006年からは年3回の定期演奏会を開催しようと決めました。うち1回はサマーコンサートとして多様な曲に挑戦していく企画でした。

2006年は2月、6月、12月に定期演奏会があり、田久保先生のご紹介により第53回定期演奏会には指揮者に清水宏之氏をお願いすることが出来ました。

第54回定期演奏会は「親子で楽しむオーケストラの魅力」という副題を付け、現在はバレエの指揮でご活躍の井田勝大氏の指揮により、グリーグ「ペールギュント」の抜粋をナレーション付きで演奏しました。これは、厚木交響楽団にとっては新しい形の演奏会でした。また第55回の定期演奏会には指揮者の清水宏之先生とご親交の深いピアニスト江口玲氏がアメリカからちょうど日本にいらっしゃるタイミングに共演して頂きました。

チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番で、素晴らしい演奏に魅了されましたことを思い出します。



新しい試み。第54回定期の華やかなステージ

人と人の出会いやご縁はとても大切だと実感させられる日々が続く中、2007年4月の第56回定期演奏会のソリストはヴァイオリンの矢部達哉氏に決めました。矢部氏はご幼少の頃、当団のコンサートミストレス天野克子さんのお弟子さんであったというご縁もあり、かつての師弟が共演する演奏会が実現しました。

同年7月の第57回定期演奏会は「イタリアオペラへの招待」と副題を付けオペラアリアを中心にした演奏会となりました。指揮を御願いました大浦智弘氏は大変オペラにお詳しい方で、練習中にストーリーを話して下さったり、時にはご自分でもアリアを歌われながらの丁寧なご指導でした。それまではオーケストラだけのプログラムを中心に取り上げて参りましたが、この10年で合唱団との共演、アリアの伴奏、バレエ団との共演などを通して、音楽の領域を広めて成長して参りました。多くの方々との出会いに感謝し、益々研鑽を積み成長していきたいと思っております。今後とも皆様のご支援の程どうぞよろしく御願いたします。

次号は「厚木交響楽団40年の歩み」PartIII：団創立30年から40年までの歩みを掲載予定です。



厚木交響楽団 創立40周年記念公演シリーズ 第3弾



●第79回定期演奏会

2017年12月17日(日) 14:00 開演

会場/厚木市文化会館 大ホール

指揮/田久保 裕一 独奏/今井 仁志 (NHK 交響楽団)

ベルリオーズ 序曲「ローマの謝肉祭」

マドセン ホルン協奏曲 (日本初演)

モーツァルト ホルン協奏曲第1番

ベルリオーズ 幻想交響曲作品14

●第80回定期演奏会

2018年4月22日(日) 14:00 開演 (予定)

会場/厚木市文化会館 大ホール

指揮/道端 大輝

チャイコフスキー 幻想序曲「ロメオとジュリエット」

プロコフィエフ 交響曲第1番「古典」

チャイコフスキー 交響曲第6番「悲愴」

インペク【にしお】
の
つぶやき

第2回



暑くて意欲が...

フロムシュテッド氏

私の今の職場ではクラシックコンサートを年に数回主催しています。職場に入りたてのころフロムシュテッド氏のコンサートがありました。土曜日の夜公演で、オケのメンバーは三々五々ホール入りしますがマエストロが登場しません。招聘マネジメントしている会社からは17時からリハーサルというタイムテーブルが届いていたのですが…。実は、氏はキリスト教のとある宗派の敬虔な信者で、その教義にならって土曜日は休日であり仕事(=リハーサル)はしないとのこと。じゃ本番は???彼にとって本番は仕事ではないのだそうです。神に捧ぐものなののでしょうか?それでもギャラは持っているのですから「仕事じゃないの?」とも思うのですが(笑)

また、同じく宗教上の理由により徹底した菜食主義者として有名で肉だけでなく、動物の関わる食材を使用しているものは口にしないとのこと。NHK交響楽団へ客演した際、N響事務局は昼食に蕎麦を出したが、蕎麦つゆは鰹を出汁にしたものであると知った氏が麺のみを食べたというのは特に有名なエピソードです。

※ヘルベルト・フロムシュテッド(1927~) アメリカ生まれの
スウェーデン人指揮者

コシュラーさんの思い出

チェコを代表する指揮者といえば、チェコ・フィルハーモニーを率いて何度も来日したヴァーツラフ・ノイマンが特に有名であるけれど私は、ズデネク・コシュラー(1928-1995)氏もとても好きな指揮者です。

チェコといえば政治的に複雑な地域ではあることはみなさんご存知のことと思います。1990年代に入って東西冷戦の一方の雄であったソ連が「民主化」したため、西側諸国と対立してきた国々が次々と自由化し西側へと移りました。コシュラー氏の祖国チェコ・スロヴァキアはチェコとスロヴァキアという二つの国に分裂し、新しい出発をしたのは記憶に新しいところですよ。

おりしも1993年2月新チェコ人のコシュラー氏が、分裂した側のスロヴァキア・フィルを率いて来日しそのメインのプログラムがチェコの国民的作曲家スメタナの「わが祖国」全曲だったのです。日本に到着してすぐ行われた記者会見で「チェコ人のあなたがスロヴァキアのオーケストラでチェコを代表する曲を演奏することをどう思う?」というかなり意地の悪い質問に対して「私は、素晴らしい曲を素晴らしいオーケストラと演奏する。ただそれだけです。音楽に政治やイデオロギーは関係ないのです」といった答えをしたそうです。本当に素晴らしいと思いました。何公演かの内の一つにスタッフとして参加しましたが、楽屋では当時普及し始めたデジカメ(たぶん秋葉原で購入したと思われる日本製)で写真を撮りまくるおちゃめなコシュラー氏と、舞台裏で聞こえてくる演奏をととても幸せそうに聴きながら笑顔で仕事をするスロヴァキア・フィルの舞台スタッフさんの姿が忘れられません。

「カヴァレリア・ルスティカーナ」

「カヴァレリア・ルスティカーナ」というオペラをご存知でしょうか?

オペラはご存知なくても、間奏曲はととても有名でご存知の方も多いと思います。が、実際の物語といえば、兵役帰りの若く貧しい男トゥリッドゥが、結婚の約束をして彼の子どもを身ごもったサントウツツアがいるにも関わらず、元の彼女である人妻ローラと浮気・不倫をして、ついにはサントウツツアの告げ口によって妻の浮気に激怒したローラの亭主アルフィオと決闘となり、トゥリッドゥが殺されるという昼メロ顔負けの物語。「カヴァレリア・ルスティカーナ」とは「田舎騎士道」という意味で妻の浮気相手を殺しても罪にならないというシチリア地方のローカルルールや婚前に身ごもる事はご法度といったカトリック教義を織り込んだお話です。

「カヴァレリア・ルスティカーナ」はヴェリズモオペラといわれ、それまでの、歴史に題材をとり神話中の人物や英雄貴族を登場させるオペラに代わり、一般庶民が主人公になったのです。

「カヴァレリア…」の間奏曲は、劇中聖歌隊によってうたわれる聖歌をモチーフにかぎりなく美しく切ない音楽です。間奏曲だけを聴いたり、演奏していた私はオペラの内容を知ってそのギャップに本当にびっくりしたことは言うまでもありません。ぜひ全編を一度お楽しみください。名匠フランコ・ゼッフィレリが映画化したDVDなど楽しめるものがたくさんあります。※西尾さんは7月下旬の杉並区民オペラで、この作品を演奏しました。

事務局より

- 去る4月23日に開催されました第77回定期演奏会へのご来場、誠にありがとうございました。当日はいろいろとハプニングもありましたが、滞りなく終了できましたこと、心より御礼申し上げます。珍しいトロンボーンコンチェルトや、ワグナーチューバを加えてのブルックナーの大作、お楽しみいただけましたでしょうか?
- 今回初めて、厚響の一般団員を対象にインタビューを試みました。長年同じ場所で一緒に演奏してきた仲間でも、改めて話を聞くといろいろと知らなかった面白い事実も出てきて、大変興味深いものとなりました。当日は「ボレロ」で、彼ら二人を含めたソロ奏者たちの頑張る姿に、どうぞ目と耳を凝らして下さいませ。
- 第78回定期演奏会のご招待券を同封させていただきます。前回「運命」を演奏したのは団長のお話の中にもありますように、1997年の第37回定期演奏会でした。文化会館大ホールに1,000人を超える市民の皆様にお越しいただき、厚響40年の歴史の中でも1,2を争う入場者数となりました。近年入場者数が伸び悩む当団でございますが、さて今回20年後の「運命」はいかがが相成りますでしょうか?友の会会員の皆様にもどうぞ、お知り合いの方にお声掛けいただけますと幸いです。(今回はチラシを多めに入れさせていただきます。)皆様のご来場を心よりお待ちしております。

(事務局 岡田史子)